

寛政前後における政治経済論の一考察

諸 川 芳 雄

一

近世封建社会の進展をその成立・発展・没落の三段階に分けるなら、天明・寛政以後は漸く没落の過程を辿っていく段階と考えられる。すなわち封建社会に本来的に内在する農民と封建武士との間の矛盾、封建武士と大商人・高利貸資本（蔵元、掛屋、札差）の間の矛盾は、漸く政治的統制を衰頹と解体との方向へと導いていく。文化的には町人文化は一層頹廢的、世紀末的となり、さらに近世初期の日本ルネッサンスより系統を引いた儒学や国学の思想、および後には蘭学の科学的思想、これら三系統の学よりでた自由主義的啓蒙的思想、社会不安打開意識、破綻を暴露し始める封建社会をいかに修正すべきかという政治経済論等が、かつては

封建的立場より発生したものが、後には発展の過程において反封建的なものに質的転化を遂げ、あるいは尊王論、あるいは開国貿易論、あるいは国家意識の覚醒普遍化と結び付き、経済的政治的矛盾と共に封建社会を震撼崩壊せしめる一つの要因となる。

このような立場においてここでは問題の範囲を限定して、寛政前後における科学的観念形態の一つとして洋学を基礎とし、儒学および国学による政治経済論のジンテーゼと見られるべき本多利明の政治経済論を中心として展開する。

二

この時代には仏教の学的生命はすでに没落し、儒学は漸く現実遊離に行き悩む時、新に第三勢力、あるいは第四勢力として現れ

たのが洋学と国学とである。国学者が儒学のドグマと偶像に対し
て破壊暴路に努力したのは、儒学の衰運を史的前提とするものに
外ならぬ。洋学はまず儒学の実践的無力を補うものとして為政者
の奨励、実学の勃興にその出発点の発生的根拠を有する。ゆえに
国学のように最初から儒学と対立しない。しかし洋学は科学的要
素を持つ。科学は自然界のみならず、人間社会にも批判の眼を向
けねばならぬ必然性を有する。科学が未だ幼稚であつて社会の不
合理不正に無意識に触れず、また意識的にも批判の眼を塞ぐ時は、
科学者は其の社会の擁護者である。しかし科学が一旦その本来的
性質を発揮して批判力を振うならば、その社会にとって不穩、ま
たは異端として排斥されるべき運命を持つ。洋学もまたこのよう
な道を辿っていた。

八代將軍吉宗の蘭学奨励以来、天文・地理・本草・医学の新知
識は盛んに輸入され、初期を代表する青木昆陽以後、安永三年
『解体新書』の刻成、寛政三年『海国兵談』の刻成、林子平の筆
渦、文化六年高橋東岡の『日本輿地図』等は洋学発達史上特記す
べきものである。⁽¹⁾ 蘭学興隆の機運に際して杉田玄白が前野良沢等
と明和八年、小塚原に罪囚解剖を見学し、発奮して良沢・大槻玄
沢等と協力して『解体新書』を訳した事を回想して文化十二年に
玄白が著した『蘭学事始』⁽²⁾は当時いかに洋学に対する情熱が熾烈
であつたかを覗い知り得る材料である。文政十一年のシーボルト

⁽³⁾ 事件の如きも知識欲のために身法網に触れるものとわず、犠牲に
なつた先覚者の悲壮な歴史である。かくて洋学は儒学国学と相並
んで、近世後期の觀念生活を指導する地歩を確立していった。科
学の力はここに儒学的常識に対して反対性を發揮し、封建的社会
意識と対立する危険なものを孕み來つた。

寛政三年に『海国兵談』は海外諸国の侵略を論じて『軍艦順風
を得れば二三百里の遠海を一日に走る』⁽⁴⁾ 恐るべき科学の進歩を指
摘し国防対策の重大性を主張したが、儒学的常識はこれを新奇の
異説として刻版を没収した。数学者にして『天文・地理・渡海』
の学者であつた本多利明の政治經濟論、殊にその富国策、海外侵
略政策(『経世秘策』、『西域物語』)は頗る激越であつて時政
を非議したのにも拘らず、林子平のような災厄を蒙らなかつたの
は、利明がその著書を公けにせず、人物寛厚よく、門人の尊信と
世間の信用とを得ていたためである。⁽⁵⁾ 利明の著書の至る所に発見
される『天文・地理・渡海』の天文は科学的宇宙觀であり、地理
は世界の大勢觀であり、渡海は開国貿易、海外發展論の意と理解
する。その後大槻玄沢の『環海異聞』⁽⁶⁾、『北辺探事』⁽⁷⁾、杉田玄白
の『野叟独語』⁽⁸⁾、桂川甫周の『魯西亜志』⁽⁹⁾、高野長英の『戊戌夢
物語』等相續いて海外事情を説き警世の鐘を鳴らしたが、封建思
想の夢は容易に醒めず、ここに儒学と洋学との対立論難が始まる。
すなわち商用でしばしば長崎に往復して和蘭文化に接した大阪

の町人学者山片蟠桃は『夢の代』において『欧羅巴ノ人ハ大船ニノリテ地球ヲ巡リソノ知ラザル所ヲ発明スルコト万国ノ及ブ所ニアラザレバ天地ノコトハコレニ任ジテ其ノ糟粕ヲナムルノ外ハアルベカラズ……ユエニ梵漢倭ノ井蛙ノ愚術ヲ出シテ総ルニ西洋ノ地動説ヲ示シテコレヲ証シ愚蒙ノ人ヲサトス⁽¹¹⁾』、また『和漢ノ人

……天下万物ノ大体ヲモ知ラズ唯我国ノ風俗今日ノアリサマヲ是

トノミ心得テ天変地妖外国ノ変事アレバ何モワカラズ驚怖スルバ

カリ……西洋欧羅巴ノ人々ハ天下万物ニ渡リテ天文ヲ明ラメ地理

ヲ察シ、世界ノ大キナル全体ヲ弁ヘ忠孝仁義ノコトハ本ヨリ致知

格物ノコトニノミ耽リテ諸藝諸術ノ無用ノ事ニ目ヲ費スコトナク

云々⁽¹²⁾と説く。司馬江漢は『春波樓筆記』に『究理をうとんじ天

文地理を好まずして風流文雅とて文章を偽り信実を述べざる⁽¹³⁾』わ

が国人の欠点を西洋人に比較し『人智残し⁽¹⁴⁾』と指摘している。本

多利明も『西域物語』巻上に『我邦の人西域のする事も弁なく：

支那の外に国々がありても皆夷国にして聖人の道あるまじく聖

人の道の外は人の道に非と一図に凝固りたる風俗なれば外に大な

る美事ありても承引する人鮮し⁽¹⁵⁾』、『一図に凝塊時勢にも移り合

がたきことも弁なく片情張て即時即文杯を手柄の様に覚え、衆人

を視下し高慢胸外に洩れ、衆人に忌嫌るなり、浅はかなる次第な

らずや⁽¹⁶⁾』と論じている。渡辺華山は『慎機論』において『維昔唐

山澁洋恣肆の風転伝して高明空虚の学盛なるより終に……自ら井

蛙の管見に落るを不知也。況んや明末典雅風流を尚び兵戈日に警
むと云えども苟も酪歌鼓舞……終に国を亡せるが如し、嗚呼今夫
れ是を在上の大臣を責めんと欲すれども、固より 袴の子弟、要
路の謀臣を責めんと欲すれども略賄倖臣、唯是有心者は儒臣、儒
臣亦望浅ふして大を描き小を取り、一々皆不痒不養の世界云々⁽¹⁷⁾
と論難している。

一方儒学側からも洋学を攻撃した。藤田東湖『弘道館述義』下
巻に『世之修西洋学、非天文医術之徒 則訳者古人之流、大低
皆無識不達国体、舍此從彼襲天慢神、其為害、不可勝言⁽¹⁸⁾
云々』また、会沢安は『新論』に『近世又有蘭學者、其学本
出訳官、不過讀阿蘭字以解其語耳、本無害於世者、而耳
食之徒謬聽西夷誇張之說盛稱揚之、或至於有著書上梓、欲
以夷蛮夏者、及他珍玩奇藥所以奪目蕩心者、其流弊亦至
於使人及欣慕⁽¹⁹⁾』、また『關邪小言』序にも『孟子之闢揚墨也、
曰揚氏為我是無君也、墨氏兼愛是無父也……西洋之学皆兼有
之、則苟誦法孔孟者、安可寛厚退讓置之問哉⁽²⁰⁾』とあって洋学
を排斥して悲憤慷慨を極めている。

洋学の立場から見れば、儒学は井蛙の管見に過ぎないが、洋学
の知識が社会生活に浸透していくならば必然的に封建社会と相容
れるものではない。世界観・宇宙観・人世観を全く異にするもの
であるから、かかる新旧両思想の抗争の具体的あらわれが天保十

年の蛮社の獄となつて、高野長英・渡辺華山・小関三英等の先覚者は犠牲となつた。思うに幕末に至つて、文久元年の西洋医学所、同三年開成所を創設し、諸藩にも開国貿易の進歩的意見が支配的になつた藩も多数存在するに至り、明治維新以後洋学万能の時代となつた事は、近世思想史の発展過程における洋学の歴史的意義を前面に押し出すものである。

〔小注〕 蘭学の始については中村喜代三氏『江戸幕府の禁書

政策』（史林、第十一卷、二一四号）、板沢武雄氏『蘭学の意義と蘭学創始に関する二三の問題』（歴史地理、第五十九卷、一号、二号、五号、六号）の研究がある。

〔注〕(1) いずれも『文明源流叢書』第二卷所収。尚大槻修二

氏『新撰洋学年表』参照。

(2) 『蘭学事始』（文明源流叢書）第一卷）

(3) 呉秀三氏『所謂シーボルト事件』（史学雑誌、第三十五篇、六、七、八、十号）

(4) 林子平『海国兵談』（安政三年刊本）序文

(5) 林子平処罰の問題に就いては三宅米吉博士と藤井甚太郎氏の二説あり。井野辺茂雄氏も亦之を論ず（井野辺茂雄氏『幕末史の研究』四一一―四一八頁）。

(6) 『環海異聞』（日本文庫、第五編）

(7) 『北辺探事』（日本文庫、第五編）

(8) 杉田玄白『野叟独語』（日本経済叢書、第十九卷）

(9) 桂川甫周『魯西亜志』（日本文庫、第五編）

(10) 高野長英『戌戌夢物語』（改定史籍集覧、第十七冊）

(11) 山片蟠桃『夢の代』（日本経済叢書、第二十五卷九四頁）

(12) 同（同、一七九頁）

(13) 司馬江漢『春波楼筆記』（日本経済叢書、第十二卷）

(14) （有朋堂文庫『名家随筆集』下、四〇七頁）

(15) 司馬江漢『春波楼筆記』（『名家随筆集』下、四三三頁）

(16) 本多利明『西域物語』（日本経済叢書第十二卷）

(17) 同（同、一二九頁）

(18) 渡辺華山『慎機論』（華山全集、第一卷一一一―一二頁）

(19) 藤田東湖『弘道館述義』下卷、四頁、ウ

(20) 会沢安『新論』（文政四年刊）上卷、十五丁

(21) 大橋訥庵『關邪小言』（安政四年刊本）

三

この洋学の思想的發展過程において、洋学をその学的根拠とし、現実問題を対象として政治經濟論を述べたのは本多利明である。

利明は越後の人、通称三郎右衛門、幼名を長五郎といい、十八歳の時江戸に出て数学者関孝和の高弟、今井兼延について数学を学び、千葉歳胤に天文学を学び、山県大式に剣道を受け、後、音羽先生と称せられ、北夷斎、または魯鈍斎と号した。⁽¹⁾ われわれは洋学を通じて近世統一的国民国家の政治組織を微かに覗いて見んとした努力を利明においてしばしば見得る。時代は正に『儒者たちの經濟力味、国学者の上古こがれ、是は神道者に三筋毛の多いまでの学業也、えせ歌よみの万葉狂い、俗あたまの座禪觀法（心学）……古方医者の漢魏見識も虐りを払う八払いの算盤筆先口先き木太刀の芝居事』と上田秋成が罵倒した時代であり、また一方安永天明の頃外国船の頻々として北辺に來り、外には対外關係一変せんとし、内には人心の推移が益々現れんとする時、社会的經濟的矛盾は鬱積せられて一大社会不安を醸せる時、この時機に外国知識より受けた刺激は少数達識の士に敏感に影響した。その代表たる本多利明は彼の政治經濟論において『渡海・運送・交易』を主眼としている。これらは彼の著『経世秘策』、『西域物語』、『渡海新法』、『自然治道之弁』、『上書』等に散見している。

洋学が未だ一般には異端視されている時、遙に時代に擢んでた彼の外国貿易論——それは田沼時代以来の風潮なりし自由主義的立場を取り、積極的海外貿易論であつた——は不知不識の間に反封建的經濟思想を胚胎した。寛政十年の『西域物語』上巻に『自国の力を以てのみして、大業は決して出来せぬ事なり』といい、『経世秘策』にも『自国ノ力ヲ以治ル計リニテハ国力次第ニ弱リ、其弱皆農民ニ当リ農民連年耗減スルハ自然ノ勢ナリ』、と卓説を述べ、『西域物語』に『情思うに只其国より産る所の物を用て、其国を養んとすれば、常に足ず、強てせんとすれば必国民疲れて成就せず』⁽²⁾ といつて封建的自給自足經濟の行詰りを觀破し、これを以て最早社会的苦悶を救う能わざるものとし、熊沢蕃山・荻生徂徠は『英才古今罕なる』經濟学者なるも未だ外国貿易の必要を説かなかつたのは紕謬なり⁽³⁾ といひ、『今更日本の土地限りの遺繰り經濟は抑も埒明べきにあらず』⁽³⁾（『經濟総論』）とて、封鎖的自然經濟を難じ、『交易も互格なれば得処の利潤も勝劣あるまじ』といつている。この点は同じ時代に蘭学を学び『答問十策』、『商海紀聞』、『和蘭奇談』、『蛮人白状解』を著した青木定遠が日蘭貿易を『彼（和蘭）ニ莫大ノ利アリテ、我ニ寸厘ノ益ナキノミニアラズ大ナル害アリ』⁽⁴⁾ と論じているのに比して対蹠的である。

利明の開國貿易論は国家主義的見地に立っている。寛政十年の

『経世秘策』上巻冒頭に『我モ固ヨリ臣ナレバ、人モ亦臣ナレバ同物又同体ノ論ナレバ論ナシ……日本ニ生ヲ稟タル者、誰カ国家ノ為ヲ思イ計ラザラン』⁽⁵⁾と説き、以下国家論を展開している事は、末期封建社会の中に呼吸しながら来るべき近代的中央集権的国民国家を漠然と予想していたのであろう。ゆえに彼の外国貿易論も国家主義的傾向を多分に包含する。『渡海、運送、交易ハ国君ノ天職ナレバ商民ニ任スベキニ非ズ』(『経世秘策』)『国君の船舶を用て天下の国産を渡海、運送、交易を以て有無を通じたらば』(『西域物語』)といい『日本海国ナレバ渡海、運送、交易ハ固ヨリ、国君ノ天職第一ノ国務ナレバ、万国へ船舶ヨ遣リテ、国内ノ要用タル産物、及ビ金銀銅ヲ抜き取テ日本へ入レ、国力ヲ厚クスベキハ海国具足ノ仕方ナリ』と論ずる。この国家意識が国学の復古的国家意識と共に佐藤信淵に消化されて、信淵の国家社会主義的帝国主義的経済論への発展的契機をなすに至ったのであろう。この国家の力に頼って外国貿易を奨励せんとするは、未だ末期封建時代より次の時代に入る過渡期に現われる重商主義 Mercantilism の風潮を表現するもので、フランス革命以前、産業革命以前の歐洲の例を挙げるまでもなく、民力の発達未熟の時ににおいては世界的共通の思想であらう。近世封建社会の矛盾が社会の表面に全面的にしばしば激化表現せられる時、近代的外国資本の力が漸く北辺にあるいは南海に押し寄せた時、交通機関の不完全、四

面環海のが国の状態に対し、利明が後に叙述する領土保全、辺境防備、属島の開発、外国貿易等に重大なる意義を認め、渡海・運送・交易を痛論したのは進取開発主義の産物であり、国家万能論の一片影である。かつ当時の鎖国退嬰政策に対する反抗の声とも見られる。

〔小注〕

開国論はすでに利明の前に親露論者工藤平助・羽太正養によつて説かれ、当時日本に在留せる蘭人チチングの記述によれば、徳川時代を通じて稀に見る自由主義的財政家たる老中田沼意次も平助の論に刺激され開国通商の意図、大船建造の計画を有していた。田沼意次はロシアとの蝦夷開発をも計画していた。

利明の国家意識より発現せる国務とは、彼によれば国産奨励の意となる。『経世秘策、後編』に『都て産物はなるだけ結構なる産物の国内に生産する様に仕向べし仕掛べし。是を名て国務という』。かくて彼は海外貿易を平和的戦争と見て『異国交易は相互に国力を抜とらんとする交易なれば戦争も同様なり』(『経世秘策、後編』)。そのために輸出貿易を痛論する。この通商航海および後述する拓地殖民のために船舶を重視して船舶を国家の『長器』とし当時の最大急務とした。⁽⁶⁾『経世秘策』巻上にも四大急務の第三に船舶の項を設け『天下ノ産物ヲ官ノ船舶ヲ用テ渡海運送交易シテ、天下ニ有無ヲ通ジ、万民ノ饑寒ヲ救フ』事を詳論して

〔注〕 (1)

宇野保定述『本多利明先生行状記』、狩野享吉博士述『記憶すべき関流の数学家』。

尚利明は関流の正統を伝え、江戸時代数学家としても代表的の人物であつた。関孝和よりの系統を見るに、関孝和——建部賢弘——中根元圭

幸田親盈——今井兼廷——本多利明（遠藤

利貞『日本数学史』による）

(2) 本多利明『西域物語』巻下（日本経済叢書、第十二巻、一九九頁）

(3) 本多利明『経済総論』（日本経済叢書、第二十

六巻『経済放言』中に所収、一八六頁）

(4) 青木定遠『答問十策』（日本経済叢書、第十二

巻、二五九頁）

(5) 本多利明『経世秘策』上巻（日本経済叢書、第

十二巻、五一頁）

(6) 利明の『長器論』について、狩野享吉博士所蔵

の利明自筆本と日本経済叢書第十二巻所収の懋

斎土生熊五郎著『船舶考』と、同一物だと本庄

栄治郎博士はする。これに対して滝本誠一博士

は土生の『船舶考』と利明著『渡海新法』およ

は土生の『船舶考』と利明著『渡海新法』およ

び『西域物語』とは内容大同小異だとする。内

田銀蔵博士『近世の日本』附録、四一二頁以下。

本庄栄治郎博士の『経済論叢』第一巻第四号の

論文。内田銀蔵博士の『海国公論』第五巻第一

号の論文。滝本誠一博士の日本経済叢書第十二

巻における解題等に詳述。

(7) 本多利明『経世秘策』巻上（日本経済叢書、第

十二巻、五七頁）

利明の進取的思想はさらに発展していわゆる『属島の開業』す

なわち拓地殖民の事業、しかも多分に帝国主義的傾向を持つ殖民

政策に現われる。寛政十年の『経世秘策』巻上にも冒頭に国家論

を展開した後、四大急務を第一焰硝、第二諸金、第三船舶、第四

属島の開業とし、第四の属島の条を『此段憚ル事ノ多ケレバ別紙

ニ書記シテ爰ニ洩シ畢ンヌ』⁽¹⁾といっているが、此の別紙には『：

抑々開業というは、船を遣て其島々北極土地を測量し、土地の

幅員を測量し自然土産を料り士人之員数を計り、其島開業となり

て大概な程の国となるべきを知て後、開業に掛るを順とせり』⁽²⁾

という。富国強兵策として拓地殖民を重視し、『西域物語』には

欧洲近代国家の国家事業は『開業を以て国務の最初とするの制度』

なるゆえ『次第に国家富栄るなり』という。かくて彼は蝦夷諸島

の開発を最急務なりとして『経世秘策補遺』および『西域物語』

において緯度経度により地理的に、あるいは産業的に縷々松前（北海道）・東蝦夷諸島（千島列島）、唐太（樺太）・カムサスカ（カムチャツカ）・山丹国（沿海州）・モスコビヤ（ロシア）の状態を叙述している。これはすでに早く近世初期より北辺に行われたわが対蝦夷密貿易が、十七世紀末葉から十八世紀終にかけの約六十年間にピーター大帝（一六七二—一七二五）によって近世国民国家として統一されたロシアと勢力接触する事によって一層複雑化した事に影響されている。

日露両国の勢力が千島・樺太地方において衝突したのは明和・安永の際で、天明・寛政の頃には露国南漸、英国東進を憂う国防論・蝦夷地経営論の勃興、対露政策論が行われるに至るが、早く長崎の訳官、吉雄耕牛、松前の松前広長がこれに注意し、天明元年には工藤平助が『赤蝦夷風説考』⁽³⁾を著し具体的の論策を発表した。『赤蝦夷風説考』にはロシアの歴史を説いて国力発展の情勢を物語り、その勢力がすでに蝦夷地に迫れる事を述べて国民を戒め、さらに国を治めるには国力を厚くすることが必要である、国力を厚くするには、『宝貨』を国外に出さず、外国の『宝貨』を我国に取入れねばならぬとの経済論を述べた後、開国論を唱え、幸い露国では日本と売買したい希望を有するから、其請を容れて蝦夷地外数力所の港を開くと共に、蝦夷地を開拓して国家富饒の策を講ずべき旨を力説している。工藤平助の蝦夷地経営論は一面

またロシアに対する防禦策であつた。平助は『此まゝにすておきてカムサスカの者共蝦夷人と一緒なれば蝦夷もオロシアの下知に附従う故最早我国の支配は請まじ』⁽⁴⁾といっているがロシアを侵略主義国と見ず『兵威を以て暴逆に切取、又は無名の兵は出さぬとかや』と觀察した。『赤蝦夷風説考』はその後江戸政府に提出され、時の老中で積極的財政家であつた田沼意次はこの書に刺激せられて蝦夷地開拓の事業に着手したが、子意知が他の大官のために弾劾されて殺されるに至り中止を余儀なくされた。この時の計画は専ら工藤平助の意見に基づき開拓すなわち対露策であつた事は、勘定奉行松本秀持の伺書に『前書之通り土地開候得ば自ら諸商人共も入込、人別相満ち候得ば、追々異国の渡り国を取締め、御威光を以、西はサンタン（山丹）、マンチウ（満洲）、東は赤人の本国迄、御国に伏属仕候様取計候は全く永久之御取締り出来云々』とあるに對して『伺之通り』の指令を下している事によつても推察が可能である。この時の江戸政府は親露論者平助の觀察を是認し、兵備を講ずる必要を認めなかつたのであろう。

利明も、工藤平助や田沼意次と同様に露国に好意を寄せた。『西域物語』において寛政四年九月に有名なロシア使節ラックスマンが伊勢国白子町の漂民幸大夫等を送つて、松前に通商を求めに來朝した事を論じた後、ロシアは『万事行届きたる仕方にて万民に父母たる道に協い、如何んといふべき様なし』⁽⁴⁾といっている。

同時代に司馬江漢もその著『春波樓筆記』において『米穀賤くして武家困窮すとは甚しき間違なり……今米穀やすきに方りて魯西亜と交易せざるは愚ならずや……思うに白川侯は博學敏才にはあれど地理（世界の形勢か）の事に於ては未だ究めざるに近し、蝦夷地に於て魯西亜と交易の場を開く時は彼地自ら拓けべし』といっている。利明は従来の対蝦夷政策を『五穀の種物を持渡るを禁じ、家作道具之刃物を持渡るを禁じ、日本言葉をも土人へ教示するを禁じ、其外禁甚多し。永久夷狄の俎に置んと策るは數敷制度なり。モスコビヤにては我骨肉を削て土人へ副んとする制度なれば蝦夷諸島の土人等彼等を神仏の如く尊信恭敬するは至極其筈なり』（『経世秘策補遺』）とて、ロシア人の恩威をもって土人を馴けたのに反しわが国の消極的退嬰的禁圧ぶりを難じた上、遂に彼の所論を『他国を侵しても本国を増加せんことこそ國の務にて』（『西域物語』）という帝國主義的植民政策にまで飛躍させた。

蝦夷諸島の拓地植民策として根本は、本国の同化政策すなわち『万事万端其土地の風儀を台として日本の風儀を漸々と布くべし』（『蝦夷拾遺』）であって、植民の産業、財政移住の方法は寛政四年七月の『蝦夷開発に関する上書』⁽⁶⁾に述べ『雜費の償い方は其島自然土産を取て日本へ運送し交易して是を償う』事とし、『開國の最初は魚漁を稼穡と仕り……人数多にも罷成候はば後には耕作を可仕候』、また一面金銀銅鉛等の鉱山を採掘し、良材を伐り

船舶を作る事等の交通機關の近代化を急務となすと同時に住民増加策を立てている。これらは反封建的要素を多分に持つ。封建社会内では、交通の不便、人口増加率の停滯を結果せしめると同時にまたこれを必須条件として封建社会は存立していく。しかるに交通の發達は封建制度を揺り動かすに至る。かくて彼は『雪国出生の者は蝦夷地へ遣し、雪の降らざる國の出生の者は東洋の小笠原島へ遣したき』といい、それに加えて囚人による強制移民の策を立て『格別の重き罪人の外は悉く蝦夷土地の庶民たるべきとの御制度御建立あらば』という移民策を考える。かくて植民政策の確立、拓地植民の業が成ったならば『東洋に大日本島、西洋にエゲレス島と、天下の大世界に二箇の大富大剛國とならんことは慥かなり』（『西域物語』）といっている事は、国内の矛盾を止揚克服した後を予想しての近世的統一意識、民族發展主義の發露であらう。この証ともなるべきは彼の対カムサスカ論、対唐太・山丹・滿洲論、対アメリカ論にいずれも帝國主義的見地をとっている事によつても察せられる。カムサスは『干鮭多く出せしを松前在島へ運送し、米と麴と酒と煙草と小間物、糸針類、及刃物類鍋等と交易し』ていたが『享和の頃よりカムサスカ辺へモスコビヤの官船涉海し、モスコビヤの土産物を運送交易せしより……赤蝦夷を自然と尊重して、モスコビヤへ従いたり、是より漸々とカムサスカ開け日本を疎する也』。このような情勢においてはカムサ

スカの日本の領有権を確立させるべきであるとし、『日本国の国号をカムサスカの土地に遷し古日本と国号を改革し飯館を居へ、貴賤の内より大器英才ありて、徳と能と兼備の人物を選挙し郡県に任じ彼地に住居を構え、開業に丹誠せしむるに於ては、年を経ずして良国となり、遂々繁栄を副、終に世界最第一の大良国となる⁽⁷⁾』、この結果予想せられる日露紛争を簡単に考えて『……當時モスコビヤの吏多く遊米住居するとも是に構なく、元来日本の属国の蝦夷土地なれば渠も強て彼是⁽⁸⁾いうこともなるまじ』(『西域物語』)といっている。

唐太・山丹・満洲に対しては『金銀山は多くあるべし。……佐渡の西北に所在して海路僅に二日程、殊に国界なれば片時も急ぎ度きは此事なり……捨置がたき土地なれば是迄の運上屋を台とし追々潤色を加え、終には大都會の土地となり、大城郭も独出来すべし⁽⁹⁾』(『西域物語』)という。

アメリカに対しては『懷うに東奥蝦夷カムサスカより東方地続タライン岬より東方へ渡海凡百二十里許にして北亜墨利加の土地なれば往古より蝦夷の土人漸々伝移植せしか知れず、何れ我国の人物と同種類なれば我国より撫育介抱して属国となすべき土地なり⁽¹⁰⁾』(『贅説』)

これらの説は社会不安より生れた汎日本主義的民族主義と見なす事も可能であろう。近世資本主義の波浪が正に封建日本に打寄

せんとする前夜、なお鎖国保守の風潮が支配的であった時代に、利明のように近世統一的国民国家の例外なく踏み来った経済的発展に基づく領土の拡張をもって、また封建組織を揺り動かす開国進取の論をもって、社会的苦悶を解決せんとした事は、竹山の弟中井履軒の蝦夷放棄論とは対蹠的な位置に立つものとして注目するに足る。

〔注〕

(1) 本多利明『経世秘策』卷上(日本経済叢書、第十二卷、六〇頁)

(2) 本多利明『経世秘策補遺』(日本経済叢書、第十二卷、八三頁)

(3) 『赤蝦夷風説考』は河野常吉氏(史学雑誌、第二十六編、第五号)によれば、天明三年正月完成ともいわれ、また「蝦夷風土記」所収の最上徳内著・本多利明訂『赤蝦夷風説考』(天明八年正月)とは同名異書である。

(4) 本多利明『西域物語』(日本経済叢書、第十二卷、一七七頁)

(5) 『蝦夷拾遺』は内閣文庫所蔵。一部分は『海表異聞』にもあり。

(6) 『蝦夷開港に関する上書』(東京大学蔵本。内

田銀蔵博士『馬場正通の生涯及其の著書』(史学研究会講演集第三冊所収)に引用せる寛政三

年十月の本多利明の上書と同じ。

(7) 『西域物語』(日本経済叢書、一九九頁)

(8) 『西域物語』(前掲、二〇〇頁)

(9) 『西域物語』(前掲、一七三頁)

(10) 本多利明『贅説』(東京大学図書館蔵、写本)

(11) 中井履軒『年成録』(日本経済叢書、第十六卷、六〇五頁、六〇三頁)

四

以上の外国貿易論および植民地開拓論は国内状況と密接な連関を持つ。国内における社会的苦悶、数々の矛盾の表現が、彼の認識を通過してこの論をなさしめたのである。

しからば、彼は農民の極度の窮乏と小規模農業に立脚する封建武士の極度の貧困という国内の現実をいかに認識し、矛盾をいかに把握し、それに対して重商主義者としていかなる経済論を發展せしめたか。『自国ノカラ以治ル計リニテハ国力次第第二弱リ、其弱リ皆農民ニ当リ農民連年耗減スルハ自然ノ勢ナリ』⁽¹⁾という状態の封建的自然経済と、必然的にこれに伴う所の『神尾氏が曰、胡麻の油と百姓は絞れば絞ぼる程出るものなり』⁽²⁾という領主の対農民政策とによって、遂に『間引子するの愚癖発し……良田畑は廃して手余田と名け則亡所なり……天明癸卯(天明三年)以来凶

歳不熟打続き丙午(天明六年)に距り奥羽大に飢饉し、両国にて凡二百万人余の餓死に及び亡所夥しく半国にも及び』(『蝦夷道知辺』)、この結果は生産力の停滞、武士生活費の増大に反する租税の相対的減少を伴い、この社会的苦悶は『是又悪騒の萌』となり『是治乱存亡興廢の因て出る境界なり』⁽³⁾(『西域物語』)『治平の内に次第に農民困窮して、終に乱世を招くの勢を生ずる者なり』⁽⁴⁾(『西域物語』)と觀察した。封建領主の経済的疲弊を直視して『今既に天下の諸侯至極の困難に及たり。依て商の仕送を請い、今日の凌ぎするを恥辱ともせず、二百六十余侯の内自立の侯稀にて、余は皆借財の渊に沈み、子々孫々浮む瀬更になし。……大概是困窮故所領を渡切、仕送りを請て商の手盛を給べ公私の用を達するなり。天下の諸侯永く商に所領を奪われたるに異るなし。苦々敷ことに非ずや』と、かくて利明は『経世秘策』の各所でしばしば天下の国産の凡そ十六分の十五は商人、十六分の一は士・農の収入となると説いている。

このような矛盾の対策として彼は当時の多くの経済学者と同様に国産奨励を説くが、彼等が国内的見地より立論するのに反し、利明にあつては貿易關係に注目し、輸出を計り、航海業の發達が外国貿易の盛大を来し、貿易のためには本国の産物豊富ならざるべからずとする。しかして一方また農本思想を有し『農業の道を以て国政の最初とし、勸農の官を立、撫育教導』する事を主張す

るが、封建制度維持の対策を論述した御用学者荻生徂徠の『政談』における農本論のように『武家ト百姓トハ田地ヨリ外ノ渡世ハ無テ常住ノ者ナレバ只武家ト百姓ノ常住ニ宜シキ様ニスルヲ治ノ根本トスベシ。商人ハ不定ナル渡世ヲスル者故善悪右ニ云ガ如シ。然レバ商人の潰ルルコトヲ嘗テ構間敷也。是又治道ノ大割ノ心得也ト可知』⁽⁵⁾という後期封建社会維持の指導理論として展開する極端な抑商主義ではなくて、利明の論は外国貿易を主張して商工の社会的歴史的意義を認めている。ただ当時高利貸資本の急速の発展ありとしても、未だ農業は全国的支配的産業形態であつたからこそ、彼は農は国の本なりとする思想を説かざるを得なかつたのであろう。

かくて彼は開国進取論者ではあつたが、条件的に農本主義を認める可く余儀なくされた結果、農村人口の相対的減少を憂い、『間引子』の応急策として『人民を相殖候には、村名主を以、貧民の懷孕子を相改、出産月より出生の十五歳までは母へ米二俵ずつも毎年被下置候わば将来二十年計りには余程農民出来可仕候』(『四大急務に関する上書』)といっているが、これは幕府・諸候共に財政破綻の表面的に現われんとする時なので実行不可能であらうし、また少額の米は窮乏に悩む農民には大火を消す盃水にも値しなかつたろう。『西域物語』には綿密に数代にわたる人口増殖を算定し『子孫総計七十九人、二夫婦四人にて産殖す所なり』

といっているが荒唐の見解である。ただし同書に人口問題・食糧問題解決の根本策は開国貿易・植民地開発にあることを論じているのは江戸時代に多くの学者によって説かれた人口論とは類を異にする。かくて農民疲弊の救済、開国進取の思想と連関した利明の人口論は当時英国の悲観主義者 Pessimist であるトーマス・ロバート・マルサス(一七六六—一八三四)の人口論と甚だ相似ている。利明が末期封建社会においては食物増加率に及ばざる事を認めたのは——人口と食物との関係がマルサスにおける算術級数的と幾何級数的の関係のように精密には利明においては論ぜられていないとはいえ——それは寛政十年(一七九八年)の『西域物語』においてであり、マルサスの有名な人口論 “An Essay on the Principle of Population, as it affects the future Improvement of Society” の初版刊行は一七九八年(寛政十年)である。両者所論の規模の大小精粗ありとはいえ、彼マルサスにあっては英国産業革命の初期、正にフランス革命の進行中の事であり、わが利明にあっては末期封建社会とはいえ明治維新を距る七十年前、日本が天皇親政による近代国民的統一国家となる幕の切つて落される前夜の黎明を見んとするの時である。これによつても近代政治思想、社会経済思想の歴史的・世界史的・一般性を裏書するものと思われる。ただ悲観主義者マルサスと楽観論者本多利明の見解の相異は現実の社会状況の発展の

遅速によるものであろう。

〔注〕 (1) 本多利明『経済秘策』巻下（日本経済叢書、第

十二巻、七一頁）

(2) 本多利明『西域物語』（前掲、十二巻、十八頁）

(3) 同（前掲、第十二巻、一八四頁）

(4) 同（前掲、第十二巻、一六〇頁）

(5) 荻生徂徠『政談』（日本経済叢書、第三巻、

四二七頁）

江戸時代におけるわが経済学者の経済論が歐洲のそれに比して非体系的非組織的な事は、原則的には、同時代における社会発展の進度の相異によるが、しかし、その最も顕著な現れは価値論の欠除にある。経済学上基本的範疇たる価値論に触れ得なかった事がわが国江戸時代の経済論をして体系の無い雑駁な時務論策・济世救民論たらしめたのであろう。日本近世封建社会においては地代は総て物納であつて金納地代が存しなかつた事が、当時の経済思想に価値論を含まなかつた事の基本的条件であらう。蕃山・徂徠・春台・竹山・利明等封建社会における一連の経済学者は価値論を欠除する。しかし利明は交換価値には幾分注目はしている。豊後の三浦梅園の安永二年の『価原』⁽¹⁾に『悪幣盛に世に行わるれば精金皆隠る』というグレシヤムの法則を説き諸所に、価値論に触れんとする努力を試みているが、一般の学者は貨幣数量と物価

貴きは金銀の賤きなり⁽²⁾』という素朴な貨幣数量説を認識するのみであつた。梅園以前には室鳩巢が『兼山秘策』において『金銀の数多く成り候事』⁽³⁾を物価騰貴の一因とした。

利明も物価と貨幣数量との関係を『若誤テ際限ナク（通貨ヲ）放チ与ユル時ハ諸色高値ニナリテ金銀ノ位ヲ卑下スルモノ也。通用金銀ノ位漸ク卑下スルハ国産ノ出来高ト通用金銀ト其多少不釣合トナル故ナリ。当時ハ殊ニ農民減少シテ国産出来高、追年不足トナルニ通用金銀ハ前々ヨリ融通シテ下朽ノ上へ猶追々放チ与ユルユエ、益々諸色高値トナルナリ』⁽⁴⁾と見た。この『農民ノ減少』は生産力の相対的減退を意味し——絶対的数においては増加あるいは停滞あるも——ている。これは質的変革（明治維新）の近づく時の一般的特徴であらうか。かくて物価の極端な騰落——これも末期封建社会に副次的に現われる現象であらう——の調節策として『通用金銀ハ国産融通ヲ司テ、四民ノ階級ヲ正スノ要務ナレバ不多不少諸色ノ直段中分ナル所ニ際限ヲ立テ余リニ下直ナラバ放チ与エ、余リニ高値ナラバ引揚ゲ是ヲ制ス』⁽⁵⁾（『経世秘策、巻上』）、また『西域物語』にも『夫通用金銀は国産融通の爲めに製作せし者なれば、多からず少からず、中分なる所に際限を立諸色の価余りに高値ならば通用金銀の多きを知って引揚又余りに下直ならば通用金銀の少きを知て放ち与え諸色の価を平均せしむ。通用金銀の多少差引は国家第一の政務にして常に密々差引せざれ

ば庶民の産業に勝劣出来悔恨憤怒の遺念を蘊積し、終に刑罰の罪人多くなりて国民を失うことも多きに至るなり。因て通用金銀の多少差引程大切な政務はなし』と貨幣論において物価調節策を論じている。利明が貨幣を交換の媒介物と見、貨幣価値は生産物との関係に依存するものである事を説いたのは、三浦梅園が『一通りに考つれば金銀少ければ世の中貧しく金銀多ければ世の中ゆたかなる者かと思えども然にあらず』(『価原』)とて『左のもの』を右に移し、右のものを左に移す』(『価原』)一つの媒介物と解した論と共に封建時代経済論策より近代経済学への一歩前進である。

広汎な領域にわたる本多利明の眼は貨幣論より米価論にも及んでいるが、ここにも彼の基礎理論である『渡海運送交易』の観念が強烈に作用し、この見地から食糧問題を解決せんとしている。

『夫米直段ハ諸穀ノ直段ノ兄ニテ一切ノ食物ノ直段ニ響キ』と米価の重要性を正當に評価し、それゆえ『是非有司アツテ司サドルベキハ米相場ナリ』と米相場の官営を説いているのは、前記外国貿易の官営と共に彼の思想根底に統一国家意識の存在を思わせる。

『豊作ノ国ヨリ凶作ノ国へ渡海運送交易シテ有無ヲ通ジ』、『日本国中ノ津々湊々ノ要地々々ニ交易館ヲ建テ』この館で米穀を貯穀売買して米価の統制を行いもって相場の暴騰暴落を制し、凶作に備えんと論じた。この時代には大阪の町人的傾向を帯びる朱子

学者中井竹山も『草茅危言』巻之九の『米相場ノ事』や、同書巻之六の『錢幣ノ事。物価ノ事。常平倉ノ事。社倉ノ事』において米価論を論じ、さらに町人学者山片蟠桃は『夢の代』、『大和弁』に理論と体験の統一より生れた米価論を詳論して対凶荒策としては『米冊』『粃冊』の法を説くも、『国ニ餓死アルハ価ヲ下ル故ナリ。価タカケレバ諸国ヨリ運送シテ餓死ノ憂ナシ』と奇論を吐き『自然ニ任セテヨカルベシ』と初期商業資本主義の一般的風潮たる自由(自然)放任主義を説いている。思つに竹山の社倉・常平倉の論も蟠桃の『米冊』『粃冊』論も利明の『交易館設立論』も同一の社会的現実的背景から生れたのであろう。同時にまた利明の『交易館』の精神が佐藤信淵の著書『垂統秘録』、『經濟要略』『物価余論』、『權貨法』等に現われた『融通府』への發展的契機をなしたのであろう。『融通府』は信淵の新社会建設の理論体系『垂統法』中であつて、農民を始めとして一切の生産に従事する国民は其の生産品を、私に売買することを許されず、国家が国民の生産を管理すると同時に自ら分配をも行う機関である。

〔注〕

(1) 三浦梅園『価原』(梅園全集、上巻。日本經濟叢書、第十一卷)

(2) 三浦梅園『価原』(日本經濟叢書、第十一卷、四一七頁)

(3) 室鳩巢『兼山秘策』(日本經濟叢書、第二卷、

二二〇頁

- (4) 本多利明『経世秘策』上巻（日本経済叢書、第十二巻、五三頁）
- (5) 本多利明『経世秘策』上巻（日本経済叢書、第十二巻、五三頁）
- (6) 本多利明『西域物語』（日本経済叢書、第十二巻、一九三頁）
- (7) 本多利明『経世秘策』巻下（日本経済叢書、第十二巻、七三頁）
- (8) 本多利明『経世秘策』（日本経済叢書、第十二巻、七三頁）
- (9) 山片蟠桃『夢の代』（日本経済叢書、第二十五巻、三二七頁）

利明は其の思想を基礎として人間社会の様々な事象を論じた。

『ヒストリ』の語義を解説して歐洲の政体及びその国際関係始末を論じ、⁽¹⁾国字問題を論じて『唐土ノ文字ハ字数多クシテ国用ニ不便利：：歐洲ノ国字数二十五：：天地ノ事ヲ記ルニ足レリ』⁽³⁾、

『文字は事を記し情を述べるを旨とせば数万ある支那の字を記憶せんより我日本の仮名を用て事を記さば大に便利ならん』⁽⁴⁾と仮名文字論者としての先驅の役を演じ、洋風石造建築を讚美し、⁽⁵⁾歐洲近世国家のおのの發展を正しく歴史的に把握し、⁽⁶⁾殊に英國の

富強を地理的・政治的・経済的に紹介し、ロンドン・パリ・アムステルダムを歐洲三大都と断じ、⁽⁷⁾『厄日多の尖台』、^(エジプトのピラミット)『バビロニアの高台』、『ロデス島の巨銅人形』、『モスコビヤの大鐘』、『ロンドンの石橋』等について興味ある説明を加えている。

これらは蘭書の読破によると共に、また宝歴三年・天明二年・寛政五年に漂流して多年露国に生活したわが帰朝漂流民によつて得た知識も多かったであろう。天明二年に出発した伊勢国船頭幸太夫等十六人が漂流してカムチャッカよりシベリアを経てペテルブルグにおいて女帝カタリナ二世に好遇され、寛政四年（一七九二年）使節ラックスマンと共に帰朝した事は利明を大に刺戟したと見え『西域物語』の諸所に幸太夫を拉し来て西欧文化を説いている。

〔注〕

- (1) 本多利明『西域物語』巻上（日本経済叢書、第十二巻、一三八頁）
- (2) 日本経済叢書、第十二巻、六八頁、一四三頁、一五六頁
- (3) 『経世秘策』（前掲書、第十二巻、六八頁）
- (4) 『西域物語』（前掲書、第十二巻、一五六頁）
- (5) 日本経済叢書、第十二巻、七六頁、一三三頁、一四一頁、一六一頁

(6) 前掲書、第十二卷、六九頁

(7) 前掲書、第十二卷、一五八頁

(8) それらの漂流奇談は国書刊行会刊『通航一覽』第八卷、一二四——二三四頁に詳述せり。

五

要するに、利明の経済思想はわが国封建社会の一変転期に現われた重商主義 Mercantilism の代表である。重商主義は封建社会より近代的国民的統一国家形成の過渡期に現われる思想で、欧洲においては重農主義 Physiocrats の前期における理論的産物であつて、一個の体系的組織的学説ではなく、断片的時務論・経世論である。利明の説も非体系的な時務論である。不完全、不統一な封建制度を打破して、中央集権的国家を建設し、国家の金銀(富)を増し蓄積し、国家領土の拡張という国家本位の論こそ重商主義の本質をなす。⁽¹⁾西田直二郎博士も『日本文化史序説』において、重商主義とは『金銀の国家保有、国内に蓄積すべきことの必要』⁽²⁾より起つたもので『……欧洲の第十七世紀より盛大の運を致せる経済思想はまた政治の思想でもあつた。この思想は金銀獲得は即ち富なりとし個人に於ても国家に於ても黄金の貯蔵集積が致富の方法であつて、黄金等の貴金属が国内に増蓄せられる事より他国の金を自国内に蒐め領土の拡張によりて属領内の金を本

国に取得することを富国の方策とする政治的経済的政策の由来するものこゝにその根拠をもつものである⁽³⁾』と論じている。利明がその思想の底に潜む国家意識を全面的に表現せしめつつ開国貿易の必要を説き、植民地の開発を痛論し、その結果増大する国家の富と国家の力を重視した事はその国家発展思想の反映と見られる。欧洲における重商主義発生の物質的根拠とわが国当時の客観的状況との間には多少の時間的前後があるが、共通要素が全然欠除していたとは思われない。欧洲においては、中央集権的国民国家を建設し、関税制度の改革、外国貿易の飛躍的發展、植民地の獲得、貨幣吸収、人口増加の必要等々が現実的地盤となり、その地盤の上に重商主義が勃興し、次いで価値論が取り入れられて、重農主義の経済学説が現われ、アダム・スミス(一七二三—一七九〇)に至つて経済学としての理論的体系の完成が『富国論』(Wealth of Nations) (安永五年、一七七六年)においてなされ、マルサス(一七六六—一八三四)、リカルド(一七七二—一八二三)を経て、社会の觀念形態としての経済学の發展が見られたのであろう。わが国においては社会的政治的経済的事情を異にし、すなわち割拠的封建国家より天皇親政の近代的統一国家への發展過程——その下に資本の原始的蓄積が行われていた——において、時間的に社会進展の度が遅れていたがため、国家本位の思想を醸成する物質的根拠として、元来地方割拠的であ

るべき封建制度の中に幕府を中心とする統一的集権的制度が存在するという矛盾があり、江戸時代中期以後その矛盾はアンチテーゼを増大せしめて、歐洲先進國、露・英のわが國に対する接近と共に國民的統一意識は益々拍車をかけられ、かかる条件の下に天明・寛政・文化文政の頃しばしば開國論が唱えられ、利明のような經濟學者を生ぜしめたのであろう。

〔注〕 (1) Gide and Rist: A History of Economic

Doctrine, 1925. P. 17, P. 30.

Schmoller: The Mercantile System and its Historical Significance, 1844. P. 50.

(2) 西田直二郎博士『日本文化史序説』五五五頁

(3) 西田直二郎博士『日本文化史序説』五五四頁

歴史的に見れば、利明の經濟思想は漸く波及してきた欧米資本主義進展の事実と其の理論とによって熊沢蕃山以後、荻生徂徠・太宰春台によって大成された、形式的に封建制度修正を主眼とする經濟論から大きな方向転換をした。この方向転換を必然的ならしめたのは根本的には現実の經濟發展の力である。利明の説くような日本の生産力の増進、經濟關係一般の促進は、必ずしも当時の封建社會を回復することではなくて、かえって逆に封建社會の破壊をもたらすであらう。利明もこのような經濟力の發展は町人の商業資本が諸侯武士および農民を抑圧するという結果になり、

すでに商業的勢力は士農の十五倍に達することを認めている。しかし現状放任も昔に返る事も彼にあつては望が無い程封建社會の矛盾は、農民の極度の窮乏と武士の極度の貧困となつて前面に現われて来た。そして商業的勢力のみが独り繁榮の道を辿っていく。そこで利明にとって唯一の道は、封建武士と農民を一つに結束せしめて商業階級に当らせ、その上で一步進めて封建武士が自ら変装して産業的商業的發展競争に参加し、武士がその指導者・先進者となる事であつた。封建武士階級が農民を率いて商業階級と競争する事によつて支配的地位を保全することが出来ると考へた。かくて利明の經濟學説は封建社會の破れ衣に覆われた近代的國民國家の姿である。

彼の學説は多分に實現性に乏しく現實を遊離した傾向を持つとはいへ、開國貿易論・拓地植民政策において時代における最初の、しかも最も進歩的な經濟思想であること、後代に対する思想的影響の意義あることは認められなければならない。彼が開國貿易論・拓地植民政策を論じ、王霸論の蒙を破つて國家意識の覺醒に基づく富強主義を唱へた事は幕末經濟學者への先驅者的役割をなす。かつそれらの論は封建經濟内の矛盾の認識の上に立ち、反封建的要素を多分に蔵し、社會進展に密接なる連関を持つ理論への發展的契機をなす社會的役割を演ずる。

すなわち經濟思想は近世後期より幕末政治的變革期に入り極め

て活発な思想活動を開始し、多くの著名の経済学者を出した。近世封建社会の破綻が経済の領域に益々激化し、深刻に現われて、経済問題が当時の社会的観念形態たる儒学・国学・洋学の各分野において学者の大なる関心の対象となり、幕末崩壊期の近づくと共に儒学の化石化、動脈硬化せる倫理道德主義、国学の古道主義は止揚揚棄され、政治経済論を伴った国学や儒学が思想的対立を棄てて尊王攘夷論と結合し維新の激流の中に躍り込んだ。かくて維新の政治的清算の後においてかつては異端視されながらも、利明等によって培われた洋学が、明治維新後新日本建設の科学者として登場して来るのである。